

入選

テーマ1…医療と福祉、わたしの体験
「『頑張れ』という毒物」

神奈川県・相洋高等学校3年 島袋真雪

「頑張れ」という言葉は本来、相手を励ますために使われる。しかし、私にとってこの言葉は、とくに毒のように感じられることがあった。

私は小学6年生のときに、特発性血小板減少性紫斑病という指定難病を発症した。この病気は出血が止まりにくく、体に紫斑ができやすくなる。毎日の出血と闘いながら、健常者と同じように生活できるよう、努力してきたつもりだった。その努力が報われたかどうかはわからないが、中学に進学することができた。しかし、中学1年生のとき、同学年の人々から紫斑が「気持ち悪い」と言われた。当時の私にとってその言葉は、ナイフのように心を突き刺した。家族や友人、先生方からは毎日のように「頑張れ」と声をかけられるようになっていた。その後も「頑張れ」と言われるたびに、自分自身に劣等感を抱きながら、その言葉に応えようと努力を重ねた。健常者と変わらないように見せることが、私の「頑張り」だと思っていた。

高校入学後、幸いにも特発性血小板減少性紫斑病は回復し、苦しまされてきた病気から解放されたように感じた。しかし、高校3年生のとき、全身性エリテマトーデスという膠原病を患った。自己免疫疾患であるこの病気は、様々な症状で私を襲った。最も辛いのは、様々な部分の関節痛だ。この新たに発症した病気は、再び私の心身を苦しめた。それでも、「頑張れ」という言葉は変わらず私に向けられた。家族や友人、先生方は善意でその言葉をかけてくれるのだろう。しかし、私にとってその言葉は心を深く傷つけた。「頑張れ」と言われると、自分自身の存在を否定されているようにさえ思うようになった。

もちろん、「頑張れ」という言葉自体に悪意があるわけではない。その言葉をかけてくれる人々はただ純粋な励ましとして言葉をかけてくれて

いることは理解している。しかし、病気と向き合うことが当たり前になっている私にとって、その言葉はときに毒のように感じられていた。

最近、私は友人のおかげで「頑張れ」という言葉に違う一面があることに気づいた。この言葉は、「努力しろ」、「無理をしろ」ということではなく、「見守っている」という温かいメッセージが込められているということだ。だから、自分を極限まで追い込むことが「頑張る」ということではなく、自分のペースで歩んでいくことが「頑張る」ということなのではないかと思えるようになった。そして、友人のおかげで気づけたこの言葉は以前よりも優しく感じられるようになった。これから私は、自分のペースで一步一步前へ進んでいくつもりだ。そして、友人が私を助けてくれたように、私も誰かを助けられる存在になりたい。

「頑張れ」という言葉は本人次第で「毒」にも「薬」にもなる。過去の自分と向き合い、病気を受け入れたことで、自分自身をも受け入れることができた。これまで私を支えてくれた家族や友人、学校の先生方や医療従事者の方々に感謝し、これからも病気としつかり向き合いたい。前に進むための力は、他の誰でもなく自分で手に入れる。自分自身を守るために、「頑張れ」という言葉の意味を見つめ直して、今までもこれから。